

将軍義昭の武家御城と 織田信長の二条新造御所

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

京都の市街地にはさまざまな歴史が眠っています。日々行なわれている発掘調査では、実に多くの遺構が検出され、史実を裏づけるものも少なくありません。地下鉄烏丸線建設の事前調査で発見した石垣もその一例といえるでしょう。この調査では濠跡と石垣が各所で見つかり、これが文献史料にあらわれる信長の築いた城跡だということがわかりました。この城の解釈については2つの説があり、今回、当研究所の川上貢所長が検討を加えました。

信長の築城 永禄十二年(1569)二月、信長は新将軍義昭の為の御所造営に着手しました。『言継卿記』には「勘解由小路室町真如堂光源院御古城又御再興」(永禄十二年正月二十七日条)とあり、義昭の兄義輝が永禄八年(1565)に松永久秀に攻められて討死した御所跡に造立します。これは11箇国から侍や人夫を大量に動員して古堀を広げ、二重、三重に石垣を積み、南に門、西南隅に三重の櫓をあげるなど城としての構えを備えたものでした。しかし、元龜四年(1573)に挙兵した義昭は信長に敗れて、将軍の座を逐われ、折角の武家御城も為すことなくその使命を終えています。

武家御城と二条御所 この義昭の武家御城について記述した今日の歴史書に「再建された新しい将軍邸が俗に二条城とよばれ、(中略)



写真1 武家御城を発見するきっかけとなった濠にともなう石垣(南から)

京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1976年

義昭が信長に追放されてのちは誠仁親王の二条御所(下御所)となる」といい、さらに本能寺の変で信長の嫡子信忠が、宿所の妙覚寺を出て「勘解由小路室町にあった二条城に入り防戦」したのち討死したと解釈しているものがあります。^{註1}

しかし、別の書は信長が安土築城と並行して京都にも屋敷を建設

したことについてのべ、義昭の「二条城」(武家御城)は解体されたとしています。その南の押小路室町の関白二条家の屋敷跡に信長は京都屋敷を建設し、天正五年(1577)から使いはじめますが、二年後にこの屋敷を皇太子の誠仁親王に譲ります。内裏の上御所に対して下御所とよばれたこの屋敷は、その

後の本能寺の変に信長の子信忠が籠もり討死にしたと説明しています。^{註2}つまり、信長が誠仁親王の御所として進上し、のちに本能寺の変で信忠が討死にした御所を、前者は義昭の「二条城」(武家御城)であるとし、後者は信長の二条御所とする点に見解が相違しています。どちらが正しいか次に検証してみましょう。

義昭の武家御城 勘解由小路室町の義昭の武家御城が「なぜ二条城と呼ばれたのか、なお問題を残している」と指摘されてきましたが、「二条城」を採用する史家も多くいます。『言継卿記』は義輝の御所を「武家」・「武家御所」と呼び、また「武家之御旧跡勘出小路烏丸室町間也」(永禄十年五月十七日条)と記しています。この旧跡を核に拡張された義昭の城は、「武家御城」・「公方之御城」と呼ばれ、その規模は方二町を超え、地下鉄烏丸線の発掘調査で検出した石垣から、北は出水通りまで広がっていたと推察されています。^{註4}

義昭が追放された後の見捨てられた状況にあった勘解由小路室町の武家御城について、『言継卿記』天正四年九月二十四日条に、樹木が掘られて移植され、石垣の石を諸人が取り、南門や東門を崩して、同じ年の正月に信長が着手した安土の居城普請へ引かれたとあります。また十月二十五日条に西の堀が埋められる様子を記録していて、意図的に武家御城が地上より消されたことが知られます。

二条殿から二条新造御所へ 天正四年(1576)四月、信長は眺め



写真2 義昭の武家御城の濠跡 全国初の市街地での道路下の発掘調査(北から)

のよい泉水や大庭のある押小路室町の二条殿に注目します。そして家主の二条晴良父子を報恩寺に用意した住居に移し、所司代村井貞勝を奉行に京屋敷の普請を命じます。九月には主殿が出来、翌五年十一月には主殿が出来、翌五年十一月に移徙しています。この屋敷を「二条御新造」・「二条屋敷」と呼んでいるのは、二条家の邸宅が永く営まれていた由緒に拠っています。信長はこの屋敷を天正七年十一月に誠仁親王に献上して、内裏より下に所在しているところから下御所とも呼ばれました。

天正十年(1582)六月二日に信長は宿所の本能寺で明智勢に襲われて討死、信忠は宿所としていた「妙覚寺ヲ出テ、下御所へ取籠之処ニ、同押寄、後刻討死、(中略)下御所(誠仁親王)ハ辰刻ニ上御所へ御渡御了」(『言継卿記』同日条)とあり、信忠が討死したのは下御所、すなわち誠仁親王の御所であって、押小路室町の元信長の二条御新造を前身としたものでした。義昭の武家御城とは別のものだったのです。

(川上 貢)



義昭の武家御城と信長の二条新造御所 (現在の通りに推定位置を示したもの)

- 註1 ①『京都の歴史4』学芸書林 昭和44年
②『京都大事典』淡交社 昭和59年
- 註2 熱田 公『日本の歴史11』集英社 平成4年
- 註3 註1-①の書
- 註4 『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報監1976年度』同遺跡調査会 昭和56年
- 註5 『言継卿記』天正四年四月十日および同五月二日条